



# Hiroshima City University Language Center

広島市立大学語学センター  
Newsletter No.51 (2015.3.31)



## 広島市立大学開学 20 周年記念 3 号連続特集

### 《第 3 弾》

## これからも みんなの語学センター

開学 20 周年記念特集最終回では未来に思いを馳せつつ、たくさんの外国語ご担当の先生方にご協力をいただき、皆さんを外国語へといざなってくれることわざや言葉、そして先生方からのメッセージをご紹介します。また、昨今よく耳にする“アクティブ・ラーニング”や、意外と事例の少ない電子教科書を取り入れた授業についても先生方に書いていただきました。

語学センターを生きた学びの場にしてきたのはたくさんの熱心な先生方や市大生の皆さん、また関係各所の方々であり、これからもそうであるということを感じていただければ幸いです。

### 目次：開学 20 周年記念《第 3 弾》

|                                                              |   |
|--------------------------------------------------------------|---|
| 語学センター 過去・現在・未来                                              |   |
| 次期語学センター長・国際学部 渡辺智恵先生・・・                                     | 1 |
| 外国語へのいざない・・・                                                 | 2 |
| (以下、国際学部)                                                    |   |
| 宇野昌樹先生、ト部匡司先生、金栄鎬先生                                          |   |
| 樂竹民先生、LE DIMNA Christian 先生                                  |   |
| SHULATOV Yaroslav 先生、飯島典子先生、                                 |   |
| 李玲先生、大場静枝先生、WÖHR Ulrike 先生                                   |   |
| 池田寛子先生、GORMAN Michael 先生                                     |   |
| フランス語をフランス語で学ぼう！                                             |   |
| 国際学部 大場静枝先生・・・                                               | 4 |
| What is active learning and why is it becoming more popular? |   |
| 国際学部 CARSON Luke 先生・・・                                       | 5 |
| 語学力は努力すればするほど伸びる！                                            |   |
| 国際学部 北瀬結香子さん・・・                                              | 6 |
| “史料”になったニュースレター                                              |   |
| 語学センター・語学教務員 堀本 真由美・・・                                       | 6 |
| もと兵士アランの“深く生きた”回想                                            |   |
| 名誉教授・芸術資料館もと館長 大井健地先生・・・                                     | 7 |
| 語学センターをお気に入りの場所にしよう                                          |   |
| 青木信之学長・・・                                                    | 8 |

## 語学センター 過去・現在・未来

### 語学センター長（次期）・国際学部教授 渡辺智恵



この 4 月より語学センター長に就任することになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

昨年（2014 年）、広島市立大学は開学 20 周年を迎えました。つまり、語学センターも二十歳の大人になったということになります。1994 年の開学当時、わずか 2 つの CALL 教室のみを有する小さな子どもであった語学センターは、現在 4 つの CALL 教室と 1 つの自習室、共同研究室、グループ学習室、スタジオ編集室、そして計 350 台以上のコンピュータを備えた施設へと大きく成長しました。単に体が大きくなっただけではありません。この 20 年間、5 年ごとの機器更新を通じ、中身も見かけも大きな進化を遂げています。

私自身、開学と同時にこの大学に赴任し、語学センターの成長をずっと見守り、関わり続けてきました。私が担当する 1、2 年生対象の英語授業に、「CALL 英語集中」と「e ラーニング英語」がありますが、これらの授業で利用している英語 e ラーニングシステムも、この語学センターから生まれたものです。

昨年 8 月に始まった 4 回目となる機器更新では、403A



白と黒でシックな 403A 教室

部分の機器更新に向け、協議を進めているところです。アクティブラーニングと外国語によるコミュニケーション空間の創造をテーマに、本学の皆さんにとっては、つい足を運びたくなる語学センターに、そして本学の入学を目指す高校生には、「こんなところで勉強したい」と思ってもらえるような語学センターにしたいとアイデアを出し合っています。どうぞご期待ください。



明るい 3 色のチェアで活発な雰囲気の 404 教室

## 外国語へのいざない ～第二外国語編～

もうすぐ新年度。心機一転、外国語学習をスタートしよう！そんな皆さんに外国語担当の先生方から、各言語で心に響く言葉とメッセージをいただきました。

### 学而常習之、不亦悦乎「<sup>よろこ</sup>学びて時に之を習ふ。亦説ばしからずや」(『論語』)

学んだことを機会があるごとに復習し身につけていくことは、なんと喜ばしいことでしょうか、と孔子が述べていられる。換言すれば、学ぶことはもちろん大事ですが、復習もなおかつ必要です。特に、外国語の習得をするのには、根気強く勉強、復習し続けることは一番の近道です。

孔子と言えば、中国では老若男女が知っている学問の神様として拝まれている存在です。中国本土はもちろんのことですが、台湾、香港乃至東南アジアなどにおいても孔子を祭る「孔子廟」が数多く建立されています。受験などで合格できるように学問の神様に切に祈願します。一方、日本では毎年受験シーズンになると、合格祈願のために大宰府天満宮をはじめとする日本全国にある天満宮の門を潜って、そこに祭られている日本の学問の神様－菅原道真に懇願した上で、絵馬が奉納されます。学生のみなさん、学問の神様の教えを胸に、学ぶことよりも習うことを頑張ってください。

――中国語担当 樂竹民先生



### قمر-qamar「月」(アラビア語の言葉)

アラビア語圏では、月(قمر-qamar)が美しさの象徴と見なされ、例えば

وجهك كالقمر(wajhuka kalqamari / あなたの顔は月のようだ、つまり、あなたの顔は月のように美しい)などと表現されます。

日本の近代化は、言語を含むヨーロッパ文明を抜きに語れませんが、実は近代ヨーロッパの発展にアラビア語圏の思想、哲学、またギリシア思想のアラビア語翻訳⇒ラテン語翻訳が大いに寄与しています。その証拠に、アルコール、シュガー(砂糖)、コーヒー、ソファー、あるいはジャンパーもアラビア語語源の言葉です。驚きましたか！？

――アラビア語担当 宇野昌樹先生



### Plus tu connais de langues, plus tu es humain. 「言語が分かれば分かるほど人間性が増す」 (スロバキアのことわざ)

フランス語を学ぶことによって、文学、芸術、ファッションまたは料理をはじめ、国際協力や報道、外交、政治、経済、科学そしてテクノロジーなどの様々な分野において活用をし、社会人として得るものが大いに違いありません。しかし何より、新しい言語を身に付けるあなたには新たな経験を積むことになります。それによってフランス語を学ぶあなたの価値観や人間性が豊かになり、自分の世界観が広がると信じています。

「言語が分かれば分かるほど人間性が増す。」このスロバキアのことわざ通り、はなせる言葉を一つ増やすだけでもきっと自分という人間が豊かになるのではないかと思います。

――フランス語担当 LE DIMNA Christian 先生



### 뿌리 깊은 나무는 바람에 흔들리지 아니하고… 「根の深い木は、風に揺れることなく…」 (ハングル最古の詩集)

ハングル(韓国・朝鮮語の文字)で書かれた最古の詩集にある一節です。近現代の厳しい時代にも朝鮮半島の人々はこの句をししばしば用いました。最近ではドラマのタイトルに使われているとか…。

さて、どの外国語も習得は難しいですが、韓国語は日本語に構造が似ているので、始めればどんどん自分で先に進めます。いっしょに韓国語を勉強しましょう。

――ハングル担当 金榮鎬先生



### Heute ist die beste Zeit. 「思い立ったが吉日」(ドイツのことわざ)

ドイツ語を学ぶと新たな世界が拓けます。ブンデスリーガ(ドイツのプロサッカーリーグ)で大活躍する日本人をはじめ、ドイツと日本の交流は多岐にわたり、すでに約 150 年の歴史があります。ロマンチック街道を散策する自分を想像してみてください。ドイツに行ってみよう。そう思い立った今日が最も大切です。

さあ、ドイツ語をはじめましょう。

――ドイツ語担当 ト部匡司先生



### Глаза — зеркало души 「目は心の鏡だ」(ロシアのことわざ)

人の目が本当の気分を表していると言われていいます。笑顔だったとしてもそれが本音でない場合は目が暖かくなならないし、逆に嫌な状態に置かれたとしても目には希望の光があります。相手の目を見たら、気持ちは初めて通じ合います。コミュニケーションの玄関である目が人間の心への扉でもあり、新たな世界に導いています。

日本と 300 年以上の交流史もある隣国、その豊富な文化や習慣へ扉を開きませんか。＼(\* ʘ' )ノ

――ロシア語担当 SHULATOV Yaroslav 先生



### 三人行，必有我师焉 「三人行へば、必ず我が師有り」(『論語』)

三人で行動すれば、そこには必ず自分の手本となる人がいるものです。そこで、他人の良い点を見習い、良くない点について、まず自分も同様な欠点を持っているかを反省してみます。もし自身もその欠点を持つようであれば改めておきましょう、と孔子が述べられています。

学生みなさん、日々の出会いを大切に、あらゆることについて謙虚な態度を持って他人と学びあい、そこからより良い自分を見つけてください。

――中国語担当 李玲先生



### 地上本没有路，走的人多了，也便成了路。 「地上に元々道は無い、多く人が歩けばそれが道になるのだ。」(『故郷』鲁迅)

日本でも名高い中国近代文学の文豪鲁迅が自伝的な短編「故郷」を結んだ言葉である。「こんなことに興味を持つ人は自分くらいだろう」と思っても兎も角情報を集めて調べてみてはどうだろう。史上殆どの発明・思想も当初は一笑に付されてきた。しかしその考えに共鳴する人が徐々に現れて社会は進歩したのである。

新入生の皆さん、興味があって進みたい先には道がないかもしれない。でもそれだけで諦めないで下さい。あなたが歩き出した後から歩く人も出てきて道になるのです。

――中国語担当 飯島典子先生



### Avec le temps et la patience, on vient à bout de tout. 「時と忍耐によって、何事も成し遂げられる」 (フランスのことわざ)

新学期、新しい一年が始まります。皆さんは、きっと張り切って外国語学習に取り組もうと思っていることでしょう。

とはいえ、その結果がすぐに出るとは限りません。また、挫折感を味わうこともあるでしょう。でもそこで諦めず、時間をかけて辛抱強く勉強を続けましょう。何事かを成し遂げようとするとき、必ず必要となるのが時間と忍耐なのですから。

――フランス語担当 大場静枝先生



### Als die Nazis die Kommunisten holten, habe ich geschwiegen; ich war ja kein Kommunist. Als sie die Sozialdemokraten einsperrten, habe ich geschwiegen; ich war ja kein Sozialdemokrat. Als sie die Gewerkschafter holten, habe ich geschwiegen; ich war ja kein Gewerkschafter. Als sie mich holten, gab es keinen mehr, der protestieren konnte.



ルーテル派牧師のニーメラーが、ナチス政権下のドイツにおける弾圧政治や言論統制の被害体験から、政治的無関心の弊害を説いた言葉。今日を生きる私たちにとっても、重要な呼びかけです。

国際学部で与えられる、他国の言葉だけではなく歴史・政治・文化・思想を学ぶ様々な機会を掴みましょう。

――ドイツ語担当 WÖHR Ulrike 先生

Go on to the next page →



## 外国語へのいざない ～英語編～

**no lyric has ever stopped a tank 「詩が戦車を止めたことはない」**  
**(アイルランドのノーベル文学賞受賞者 Seamus Heaney (1939-2013) の言葉)**

言葉には戦車を押しとどめる力はない、でも、だからこそ持ちうる力があります。戦車を止めることのできる兵器があったとしても、兵器は人と人との心の絆を築くことはできません。

言葉にできることがどんなにたくさんあるかに思いをめぐらせてください。言葉は恐ろしい傷を心に残すこともあります。でもおそれないでください。言葉をいつくしみ、その力を心に留めて、人とのゆたかな関係を築いてください。

――イギリス文化論他担当 池田寛子先生



## 電子教科書

### フランス語をフランス語で学ぼう！

国際学部准教授 大場静枝



本学で採用されているテキスト  
 © Hachette Education

本学のフランス語科目の特徴は、「ダイレクト・メソッド（直接教授法）」という教授法を取り入れていることです。これは、原則として学習者の母語を使わないで、習得を目指す言語、つまり「目標言語」だけを使って指導する教授法のことです。いわば話し言葉の習得を優先する、「聞く」「話す」重視の教授法です。とはいえ、本学の「ダイレクト・メソッド」は完全な直接法ではなく、部分直接法です。ですから 100%フランス語でフランス語を学習するものではありません。フランス人教師と日本人教師がペアを組んで、フランス人教師は 90%以上、日本人教師は 40%程度、フランス語を使って授業を進めています。

この教授法を支えている柱の一つが、二人のフランス人教師、ルディムナ先生とブシテ先生です。ルディムナ先生もブシテ先生も日本語を流暢に話しますが、教室ではフランス語しか使いません。両先生のフランス語のシャワーを浴びることで、学習者がフランス語に浸る状態を作っています。もちろん、初心者にとっていきなりフランス語漬けの授業では、不安もあるでしょう。とりわけ大多数の学生が文法の説明を目標言語で受けることに慣れていないため、毎年、戸惑いの声があがります。フランス語で文法に関する質問ができない、直接法による「聞いて覚える」という学習法では仏検などの資格試験に対応できない、という不満もあります。それを解消するのが、日本人教師による日本語での文法解説です。

そしてもう一つの柱が、フランス製の教科書です。1 年生は Totem 1、2 年生は従来からの教科書 Le Nouveau Taxi を使って授業を受けます。これらフランス製の教科書には日本語の記述は一切ありません。ここで少しフランスの教科書について紹介しましょう。

フランス製の教科書は、日本製の教科書に比べてはるかに進んでいます。まず、教師用の教科書が電子化されているので、プロジェクターを使って教科書の各ページを大きく映し出すことができます。スクリーンの代わりにホワイトボードを使えば、教師は映し出されたページの上に重要事項や注意事項を書き入れて説明することもできます。特にフランス人教師の授業では、初心者にとって授業についていくのが難しいこともあります。例えば、先生が教科書のどの部分を説明しているのか分からなくなってしまうといったことです。でもプロジェクターで映し出すことで、視覚的な理解が促され、そうした問題も起こらなくなります。

また、クリック 1 つでディアログや発音練習用の音声流れる仕組みになっています。音読練習の際に、学生は手元の教科書ではなく、前のスクリーンやホワイトボードを見て音読ができますので、教師は学生の口の動きを見ながら発音を聞くことができ、その結果、効果的な発音矯正ができるようになります。さらに教科書についている「ツール機能」を使うことで、重要なところに蛍光マーカーや下線を引いたり、付箋を貼ったり、音読練習のためにテキストの一部をマスキングしたりすることもできます。

教科書には学習者用の DVD-ROM もついています。付属の DVD-ROM を使って、自宅でリスニング練習はもとより、動画を楽しみながら自然にフランス語のヒアリング力を高めることができます。

以上のように、本学のフランス語の授業は、フランス人教師とフランス製の教科書という二本の柱によって「フランス語でフランス語を学ぶ」環境が整っており、より実践的な学びの場になっています。



マークをクリックすると音声再生され、付属の DVD-ROM の再生機能もある。学生は DVD-ROM 付テキストを 2 年間使用。



ホワイトボードに電子教科書を拡大投影し、ホワイトボードマーカーで書きこむことができる。

**Things do not change; we change.**

「物事が変わるのではない。私たちが変わるのだ。」(『Walden』Henry David Thoreau)

Henry David Thoreau is one of America's most celebrated writers and thinkers of the 19th century. He studied religion at Harvard College and was greatly influenced by Hindu and Buddhist thought. From Eastern philosophy, he recognized not only that life is a miracle but also how important it is to not waste the miracle of life.

In this short quotation from his classic book Walden, Thoreau explains that life does not happen to us; we make it happen. Living requires welcoming new experiences and using them to improve our selves and society. It is my hope that Thoreau's words inspire you to change how you see the world by reading, studying, speaking, listening, and living enthusiastically.

――アメリカ文化論他担当 GORMAN Michael 先生



## アクティブラーニング

### 'What is active learning and why is it becoming more popular?'

国際学部准教授 CARSON Luke



アクティブ・ラーニング型の授業風景

Active learning is a process whereby students engage in activities, such as reading, writing, discussion, or problem solving that promote analysis, synthesis, and evaluation of class content.

In the past, one of the main roles of a university professor was to become an expert in a specific field of knowledge – biology, languages, economics etc. Then, through lectures, professors would pass that information onto students. Hopefully the students would then know more about the subject, and could ask their professors deeper questions, or for other sources of information. So essentially, a university was a place to acquire knowledge.

However, the world has changed. We now live in an information society, so we do not necessarily need teachers to give us information, because we have access to it ourselves. However, we now have a different problem. There is so much information!! How do we know which to read and learn? And what do we do with this knowledge?

This is where active learning comes in. Professors who use active learning now do two things. Just like in the past, they are still specialists with lots of knowledge in their field of study, and yes, they do still pass this information to students. But what they also do in their courses is create more opportunities for students to use and manipulate this information. We have computers to store and share information, so now society needs people who do not only remember information, but use and adapt it. And...take action!

So in an active learning class, your professor might talk for a while to share some knowledge (he or she might also give you information to read and prepare before a class). Then, for example, you might have a discussion task about this information. Discussing gives you the chance to analyse, synthesise and evaluate information. He or she might then give you a task in class that requires you to use this information, and your opinions about it, to do something practical. Your learning now becomes deeper as you see how information affects the world around us and can be used by you in real situations.

Educators now know that 'doing' in a class creates different learning abilities than just 'listening' in a class. Doing helps students to learn skills that will help them in their wider life after university – how to take action when something is not working well, how to work in teams, by yourself, how to make better decisions, how to adapt to different situations. In life, we never stop learning.

Basically, the goal of this type of learning is to help you understand and evaluate the information you encounter more deeply, and to develop the ability to actively use it, and to become an active person in your future life.





## 祝 全日本学生ドイツ語弁論大会第1位受賞

### 語学力は努力すればするほど伸びる！

第15回全日本学生ドイツ語弁論大会1位  
ドイツ連邦共和国総領事賞受賞  
国際学部4年 北瀬結香子

Guten Tag 皆さんこんにちは、国際学部4年の北瀬結香子です。私は2013年9月から2014年の夏にかけて、市大の交換留学制度を利用してドイツのハノーファーに留学していました。このニューズレターを通して、どこか海外へ留学したいと思っている市大生の皆さんの参考になればいいと思います。

さて、ドイツとはどのような国なのでしょう。ドイツに対する様々なイメージは皆さんもそれぞれお持ちだと思います。私も行く前はてっきり、みんな昼間からビールを飲み、いわゆる「ドイツ人」ばかりの一族国家だとばかり思っていました。しかし、行ってみるとイメージとは180度違いました。確かに現地の人々は、たくさんビールを飲みますが、街を見れば肌の色も、顔つきも皆違って聞こえてくる言葉も多様でした。ハノーファーは比較的アジア人が少ない街なので、始めの頃は一歩外を歩けば周りとの違いを無意識に感じていました。

そんなこんなで留学生活が始まりました。ドイツ出発前に初歩的にしかドイツ語を学ばなかったで、現地に着いたときは英語で生活していました。他の留学生と意思疎通するのはもちろん英語が役に立ちましたが、現地の人と英語で会話をするとどこか疎外感を感じ、お互いの間に壁があるように思えて仕方ありませんでした。このときから自分に喝を入れてドイツ語を勉強し始めました。毎日図書館に通い、本を読み、また同じように図書館に通っている人とコミュニケーションをとりつつ、五ヶ月過ぎた頃には、大学に何とか通えるまでになりました。

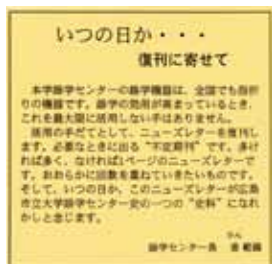
最後に留学を考えている皆さんに言えることは、外国語学習は、自分を決して裏切らないことです。努力すればするほどみるみる語学力は伸びます。留学先では、必ず誰もが「もっと頑張って勉強しないとな、もっともっとその国の言葉で話したいな」と思うシチュエーションに直面すると思います。そこで諦めずに毎日着実に取り組み、語学に関しては全く問題ないので頑張ってください！！



ハノーファーの学校にて（左から4番目が北瀬さん）

## “史料”になったニューズレター

語学センター・語学教務員 堀本 真由美



ニューズレター第2号より

今年度は大学開学20周年ということで、語学センターではニューズレターで3号連続特集を組みました。これまでを振り返るにあたって、真っ先に参照したのは過去のニューズレターです。

語学センターニューズレターは1995年4月に山本雅初代語学センター長のもとで第1号が発刊されました。その後約3年間休止していましたが、<sup>1</sup> 姜範錫先生が第2代語学センター長に着任されて間もなく、ニューズレター復刊の必要性を説かれ、第2号を1998年10月に復刊、現在に至っています。

パソコンで編集した記事をプリントアウトし、白黒コピー機で増刷、という工程は今も変わりません<sup>1</sup>。時々失敗もあり、拙くまとまりのないニューズレターですが、改めて見直してみれば、その時々語学センター教室、移り変わる機器、先生方の思い、がんばる学生の皆さんの様子をビジュアルと共に振り返ることができます。気がつくやうに発行号数も記念すべき50号を越え、姜先生が復刊号メッセージに「そして、いつの日か、このニューズレターが広島市立大学語学センター史の一つの“史料”になれかしと念じます。」と書かれた言葉が現実になっています。

開学20周年特集の機会に語学センターを再発見できる記事をご紹介します。1つは第7号の「インテンシブ座談会」です。これは、

英語のeラーニングプログラムが授業化される以前、課外講座として受講した学生たちと開発の青木信之先生（現学長）のざくばらんな座談会で、英語学習の悩みは今も昔も変わらないことや、プログラム開発の裏側が垣間見えます。もう1つは第31号の山本雅先生の退官メッセージです。その（1）は面白いエピソード中心ですが、その（2）では語学センターの土台がどのように作られたか、当初の先生方の思いが再確認できます。

現在まで継続中の連載は2つあります。「外国語に想う」は第2号でスタートし、全学の先生方や事務局職員の外国または外国語にまつわる経験談をお届けしています。第7号でスタートし、今号で第12シリーズを迎える大井健地先生の読み切り投稿連載<sup>2</sup>も知の扉、感性の扉をくすぐる、読み応えのあるシリーズです。

時代の流れと共に、語学センターは多目的利用も可能な側面を併せ持つ、フレキシブルな施設へと進化してきました。語学センターニューズレターも新しい紙面づくりを試行錯誤しながら、語学センターや先生方、学生の皆さんの様子をお伝えし、更なる未来の史料になるよう引き継いでいかれたいと思います。

<sup>1</sup> 現在は、語学センターホームページからのpdf閲覧が主で、紙面配布は限定的になっています。20周年記念特集各号は、カラー版を配布しています。バックナンバーも、語学センターホームページから閲覧できます。

<sup>2</sup> 7ページに新連載を掲載しています。

## BD連帯画文エチュード 1

### もと兵士アランの“深く生きた”回想 E・ギベール『アランの戦争』

大井健地（名誉教授・芸術資料館もと館長）

『アランの戦争——アラン・イングラム・コープの回想録』\*を数日かけて読みおえた。大河小説を読破したみたいに、達成感とともに深々とした思いの読後感。秀作BD（バンド・デシネ＝仏語圏で読まれる漫画の総称）だ。

感銘は事実なのにその思いをここに伝えようとして、端的に記せなくて繰り返し読み直す破目になった。戦争、宗教、芸術、哲学について考えるためのひとつの生きた素材になるだろうととりあえず言っておく。

PEARL HARBOR BOMBED BY JAPS——カリフォルニアで新聞配達少年アラン（1925-1999）が配った一面の見出しが読者を驚かせる。彼はこの戦争（WWⅡ）に徴兵された。戦闘員としての訓練。武装障害走、銃や戦車の操作、匍匐前進、市街戦演習……。

天啓のような美しい音楽の存在を発見したのは兵士向け娯楽施設の音楽室、婦人団体寄贈のレコードコレクションだった。アランはそれを「人生の転機となった出来事」という。

1945年2月、一個師団一万人が巨大輸送船（かつてはイタリアの豪華客船だった）に積みこまれて大西洋へ。行き先は知らされてない。ル・アーブル港に着いた日が20歳の誕生日。

次は貨物車両に乗せられる。やはり行き先は不明。たまに“ビス・コール”と呼ばれる停車。小便休憩だ。ノルマンディに着く。ここでふた月待機したのは後続の兵器が未着だったから。実際の戦闘は多くはなく、移動や駐留や、そして徴用に費す時間の方が長い。

記憶のなかから浮かびあがる兵士たち。その出会いと別れ。戦争が政治の延長ならば、戦争の終結は政治的かけひきを経て決まる。アランは南ドイツでアメリカ陸軍名誉除隊証明書を受けとる。日付けは1946年3月22日。

「アメリカにはやく戻らないと。軍隊の奨学金を利用して大学へ行こう。アメリカ人の普通の生活に…牧師になって罪人の魂を救うんだ」。バプテストの牧師になるための大学に入る。が、疑念が生まれ宗教の教場から去る。それからアメリカも捨てる。「ほとんどのアメリカ人は存在の表面だけで生きていた。僕はもっと奥深くで生きたかった」。望むのはヨーロッパ。仏在住を選んだ。大きい決断だ。

プレスリーの歌に「G I ブルース」がある。G I とは Government Issue（官給品）の略、米国陸軍兵士の俗称。日本人と日本文化を選んだドナルド・キーンもWWⅡ従軍のG I だった（その自伝も興味深い）。このアラン伝は自伝ではなく、BD作家E・ギベール（1964-）による“他伝”。



1994年のパリで30歳のギベールが、39歳年上の69歳のアランに出会って以来の聞き書きに基く。アラン自身は「無名」の人だが、名のある人との交流も深い。まず音楽家ゲルハルト・ミュンヒ。彼を介してのエズラ・パウンド（戦中、あやまった道を選んだ）、ヘンリー・ミラー、オクタヴィオ・パス。読書によるバシュラール、シュペルヴィエル、ホフマン、ヘルダーリンなど。音楽ではメシアン、ブーレーズ、シュトックハウゼン。

アランの人生の転機は幾度もあった。職種は多種多様。軍属（軍で働く民間人、例えば従軍神父の助手）、看護師助手、運転手、通訳など。絶えず読書家、思索者であった。妻の定年を待つ「十八カ月がおわるころ、私は私の人生を生きていなかったという結論にいたった。私が生きていたのは……他人がのぞむ私の人生だった」。55歳のときに、私は生まれた。

アランの誠実な思索的人生で信仰の問題こそが核心の縦糸のはず。彼は無教会派ということになるのだろうが僕の理解は十全でない。「プロテスタントの原理主義者……それは甘すぎるジュースのように耐えがたい」。「イエスの教会だと思ったことはありません」。「教会を建てたのは……女嫌いのモラリスト、根本的に性愛を好まないあのパウロの手によるものです」。

アランの人生は何だったのか。晩年のアランは軍隊で知り合ったもとのG I たちに音信を求める。国際電話の会話。

一友人「いい人生だったよ。子どもは5人いて、全員大学を出た。お金はいっぱい稼いだよ」。

アラン「それはよかったね！僕は全然ダメだったよ！」

そう答えるしかない。何を目的にアランは生きたか。人生のどんな瞬間も、存在の深味のある良質な人間であること。アランは深く生きた。だってそれが証拠にギベールに“発見”された。アランの人生の、長い時間をかけてBD化するに足る「深味」がギベールの心をとらえたのだ。

アランの物語はギベールの的確なイメージ\*\*をとおしてさらに静かに内省的に僕らに届いてくる。

\* E・ギベール著、野田謙介訳、『アランの戦争』は国書刊行会2011年1月刊。2500円

\*\* YouTubeで「Emmanuel Guibert」を検索すると神技みたいな彼の水彩テクニクが鑑賞できる。





## 語学センターをお気に入りの場所にしよう

広島市立大学長 青木 信之



図書館をはじめ、大学には様々な施設がある。大学時代にもっとも多くの時間を過ごすのは、自分のゼミ室や工房などかもしれないが、ぜひその他にも、お気に入りの場所をつくって欲しい。そして、もし学生時代に外国語を徹底的に勉強するなら、語学センターをそういったお気に入りの場所に加えてもらいたい。

語学センターには授業だけでなく、自習したり、レポートを書いたりするのに快適な設備が整っている。例えば、自習室に足を踏み入ると、一つ一つの学習ブースが、とてもパーソナルな空間になっていることに驚くだろう。実は、語学センターの自習室ブースは、都市圏のレンタル書斎をイメージして作られている。椅子に座ると、ブースによる適度の囲まれ感があり、パソコンを立ち上げ、筆記具を所定の場所におき、本を広げるとまるで自分の勉強部屋にいるような気になるはずである。勉強につかれた時は、映画もみるのも楽しい。そのときは洋画はぜひその言語で、邦画は英語の字幕を下に出しながらみて欲しい。勉強し、楽しみ、そして何時間でも過ごせるような、語学センターをそのようなお気に入りの空間にして欲しいと思う。

もちろん、外国語の勉強もして欲しい。それも、その外国語にとりつかれたように勉強して欲しい。外国語を仕事で使えるまでにするには、まず2年はとりつかれたように勉強することが必要である。強い意志が必要だが、その場所に行けば、かならずその気になる。語学センターをそういった場所にしていただきたい。

大学時代、ここで何時間も何時間も過ごしたという思い出の場所をぜひつくって欲しい。考え、悩み、なにかに打ち込んだという場所。そんな場所に語学センターを加えて欲しい。語学センターからみる夕陽は息を呑むほど美しい。かならず心に残る風景になるはずである。

十数年も前、中国からのある留学生がいた。授業期間だけでなく、休みの期間中も、彼はいつも語学センターにやってきて、朝から晩まで日本語や英語を勉強していた。彼は語学センターの職員だけでなく、語学センターに出入りする教員とも顔なじみになっていた。

卒業後、彼はアメリカの企業に就職し、現地で働いている。彼にとって、この語学センターは、今どうみえるのだろう。大学時代、彼の生活の多くの時間を占めたこの自習室はどうみえるのだろう。ぜひ、聞いてみたいと思っている。



語学センター自習室内

### イベント報告

#### 学外長期研修成果報告会の開催

2015年3月30日(月)に、語学センター403A教室にて、国際学部の欒竹民教授による学外長期研修成果報告会が開催されました。平成26年度より開始された中国の蘇州大学、国際関係学院での研修を終えられ、「日本語における漢語の意味変化について―「馳走」を一例として―」をテーマに報告をされました。



欒先生の報告会の様子

発行日 2015年3月31日  
発行 広島市立大学語学センター  
〒731-3194 広島市安佐南区大塚東3-4-1  
編集 堀本真由美、加藤美奈(内線:6410)  
Phone (082)830-1509 Fax (082)830-1794  
E-mail lang@intl.hiroshima-cu.ac.jp  
ホームページ  
<http://call.lang.hiroshima-cu.ac.jp/lang/index.html>



#### 20周年特集号編集後記:

語学センターはその名前からはイメージしづらいですが、合計350台を優に超えるパソコンを配した教室を正常稼働させる使命を帯びた施設です。20年の間で、パソコン、インターネット、テレビなどテクノロジーの大きな変革にも向き合ってきました。今後も機器に限らず様々な変化があることと思いますが、それを楽しみつつ、外国語学習をしっかり応援する環境づくりができればと思います。

これまでに語学センターニュースレターにご執筆くださいました(くださっている)先生方を始め、関係全ての方々に改めて感謝申し上げます。